

タラヨウ



城山公園にて

(撮影：桐原真希)

■温かい所が好き？

タラヨウは、温暖な環境が好きな常緑樹で、西日本が主な分布域です。ところが、東上金山地区の標高300メートル付近では、作業道の右手には温かいところが好きなタラヨウが生え、左手には寒くて標高の高いところが好きなナナカマドという木が伸びている場所があります。

す。同じ視界に南と北の生き物が一緒に育つことは大変興味深いことです。

■私を食べて

長さ約20センチの厚く大きな葉に、真っ赤な実の粒がびっしりと詰まった塊は、大変目立ちます。冬は特に、緑色の葉と赤い実の組み合わせの樹種が存在感を増し、ナンテン、マンリョウ、クロガネモチなどは、まさに鳥に食べて欲しいという色艶です。タラヨウも例外なく、積雪で地面のエサが探しにくくなった野鳥が、タラヨウにも沢山訪れます。この実を撮影した城山公園では、ヒヨドリとツグミが何十羽も一緒になって賑やかにお食事タイムを同席していました。

■120円切手で送れるはず！

「葉書」の名の由来はこのタラヨウという説があります。焼き鳥の串など先が尖ったもので、葉の裏に文字を書くと、鉛筆で書いた後のように、くつきりと黒く線が浮き出ます。押し葉をして保存すれば、書いたものを残すことができ、私の手元

には4年前のタラヨウがまだ読める状態で残っています。実は、毎年今年こそは、と思っっていますが、住所と名前をきちんと書いて、120円切手をしっかり貼れば、郵便で相手先に届くという話があります。インターネットで到着したレポートを見て、これは早くやってみなければと思っっていますが、なかなか機会がありません。興味のある方は是非挑戦してみてください。感謝や愛のメッセージを添えてみるのもいいかもしれませんね。



文字が書ける葉

自然観察指導員

桐原真希

祐生出会の館【緑水湖畔】インフォメーション

祐生の交流した人の中に橋本興家があります。橋本興家は祐生より10歳年下で、明治32年(1899年)八頭町船岡に生まれ、鳥取師範学校、東京美術学校(現東京芸大)を卒業し、教員をしながら版画制作をしました。「城の版画家」と言われるように、日本の伝統美の表現に心を用い、城をモチーフとした作品が多くあります。昭和49年には日本版画協会の理事長に就任し、その作品は国の内外で高い評価を得ています。祐生とは、「榛の会」(50人会員の版画年賀状交換の会)で、昭和13年から29年までご一緒しました。

※「城」「大山」「庭園」「花」など72点を、3月11日(月)まで展示しています。

■開館時間：9時～17時 ■休館日：毎週火曜日 ■問合せ先：☎66-4755

